『異本義経記』の女性像

――静を中心に――

山本　淳

はじめに

『異本義経記』[1]とは、近世初期に成立した「判官物」の一展開である実録風の作品である。その特徴として、『義経記』に構成を倣いながら史書からの引用や独自の異伝・俗伝などを取り込んでいる、また本文の後に付された一段下げの注記などもみられる点が挙げられる。こうした特徴やその箇条書き風の文体から「軍記評判」の影響を受け成立した作品であると考えられている。[2]

稿者はこれまで主人公である源義経が〈兵法の伝授者〉〈良将〉として『異本』の中で形象されていたことを指摘してきた。[3]しかし義経の伝承といえば、その他に「色好みの貴公子」という性格も大きな特徴の一つといえる。浄瑠璃御前、牛王姫、[4]鬼一法眼の娘（桂、皆鶴）、河越重頼の娘、そして静といった様々な女性たちとの関係は流離と合戦に明け暮れた武将の生涯に華やかで哀しい彩りを添えている。それらは『義経記』を始め幸若舞曲やお伽草子、古浄瑠璃などに数多く展開されており、「判官物」の人気を支えてきたといえよう。[5]

『異本』にも義経を取り巻く女性は様々に登場するが、[6]興味深いことに浄瑠璃御前や牛王姫、皆鶴のように『異本』には『義経記』には登場しない人物も描かれている。これは『異本』が異伝・俗伝をも取り込む姿勢に拠るものであろう。このような女性の登場人物に関する先行研究は、大城実氏が義経の婚姻関係から『異本』の拠っている伝承基盤を想定するもの[7]と、『異本』の河越氏への興味の一端を河越重頼女の登場個所からも探ってみた拙稿[8]などがある。しかし、いずれも『異本』の説話そのものというよりその伝承背景を対象とするものである。

本稿では、『異本』に登場する女性がどのような役割をもって描かれているのかを「判官物」において代表的な女性である静を中心に、「軍記評判」の世界における女性観との関連を通して考察していくことにする。

一、義経の女性認識

『異本』には、他の「判官物」と同様に女性との関係を描く説話がみられる。浄瑠璃姫や鬼一法眼女（桂姫）[9]、牛王[10]、静、河越重頼女（朝為姫）などの登場する説話[11]である。では、『異本』に登場する女性に対して義経はどのように振る舞っているのであろうか。『異本』の義経は、これまでの拙論で述べてきたように常に「兵法の達者」「武芸の達人」として描かれてきた。例えば那須与一の説話では、

「義経ハ好色ニテ女ヲ思ヒ候」由ヲ、兼末申タルニヨリ、「サラハ計テ射取」ト宣ヒタルニ依テ、其日ノ晩景ニ、玉蟲ト云傾城ヲ艤（コブネ）ニ乗テ、艤（ヘサキ）ニ扇ヲ立テ（中略）、岩国三郎兼末諸友ニ玉蟲カ舟ニ乗テ、源氏ノ方ヘ向ヒケレ共、源氏ノ方ニモ心得テ、義経モ見ヘス。　［上21B屋島合戦］

と、義経の好色を利用し玉蟲を囮に使う策略が採られている。しかし義経が好色であるという認識は平家側のものであり、結果的に平家側の策略は失敗に終わっている。

こうした「好色」に対する慎重な姿勢は「軍記評判」の世界にみられるものである。例えば『太平記評判秘伝理尽鈔』[12]にみられる、

「益テ女色ニ迷ヌレハ。賢モ愚将ト成ル物也」ト。楠ガ云シ事。実ニ理トハ今コソ思ヒ知レタレ　「京都両度軍事」（巻17・33オ）

のような発言や、『義経記評判』[13]にみられる、

よしつねはしづかをぐしてよしの山に入給ふ故に、山ぼうしにさへられてうきめにあひ給ひ、たゞのぶは女になごりをおしみて、ためらひしばかりに命をすてぬ。まことにさふらひのつゝしむべきは色の道なり。　［巻六上・一「たゞのぶ都へ忍び上る事」］

や、

なをまたたゞのふにしもかきらず、判官にもふかく色を思ひ給ふゆへに、一生むなしくうれへにしづみたまへり。されば兄弟ふわになり給ふも、平大納言ときたゞのひめをめとり給ひしより、おこつてよりとも公のうたがひやまざりしとにや。源平盛衰記に、女院の六道をかたらせ給ひしにつみふかくおぼへしは、よしつねとまさな事せしとぞ仰られし。此事もなをかまくらにもれ聞えて、九郎は天道にそむけるとていよ〳〵源二位のいきどほりふかくの給ひけるとなり。　［巻六上・二「たゞのぶさいごの事」］

のように、「好色」は「良将」の持つべきものではないとする

「軍記評判」の世界に通じる認識であろう。

では、『異本』に登場する女性は「好色は良将に非ず」という認識に即して描かれているのか。次章では静の説話を通して『異本』の女性像を検証してみる。

二、〈貞女〉としての静

「判官物」における静の様々な伝承は、貴公子義経との悲恋に代表され、人気も高いものの一つである。白拍子としての静の舞に関しては、『義経記』の神泉苑での雨乞いの舞[14]や能『二人静』や『吉野静』、幸若舞曲『静』などに描かれている。また、堀川夜討での急襲に対する機転や鶴岡八幡宮での頼朝に対する「賤のをだまき」の舞などにみる貞烈の女性という側面である[15]。

ところで『異本』の静は、吉野山での義経との別れが、

文治元年十一月十七日、義経、吉野ノ山ヘ入給フ時ニ、静ヲ召レ仰ラレシハ、「山上ハ女人結界ノ地也。御身ハ是ヨリモ都ヘ帰リ給ヘ。重テ向ヒヲ上スヘキ」由ヲ宣ヒシニ、静ハ只一向ニ御名残ヲ而已惜奉リケレトモ、叶ハスシテ、静ニ金銀並ニ丸尽ノ小鞍ヲ賜リ、雑式・下部ヲ付テ都ヘ帰サレシニ、彼雑式・下部、静ニ賜ル処ノ金銀等ヲ奪取、静ヲ捨テ逐電ス。　［下26静鎌倉下向］

と、別れの情感もなく簡潔に事実だけが叙述されている[16]。特に男女の情愛に対して積極的に記そうとはしない『異本』編者の姿勢が窺えよう。では、こうした『異本』での静は、他にどのように描かれているのか。

ア、堀川夜討説話

まず、堀川夜討説話を取り上げてみる。六条堀川の屋敷を土佐房に急襲された義経の危機に対して、

其頃義経ハ、磯ノ前司カ娘静ヲ思テ、室町ノ亭ニ置レケルカ、「土佐房心知レカタシ。御要心有ヘキ」由申ト雖（イヘトモ）、義経敢用給ハス。更ニ要心ノ気色モナカリケルトソ。（中略）義経、笑ヒ給ヒテ、「女心ノ周章（アハテヽ）サヨ」ト宣フニ、早敵ハ寄テケリ。其時義経、「御方（ヲコト）ハ、弓取ノ思ヘキ人ソ」ト宣ヒシトニヤ。　［下24B土佐房被斬］

と、静の機転が義経の台詞によって賞賛されている。この台詞は、『義経記』では「あはれ女のこゝろ程けしからぬ物はなし[17]」とあるが、幸若舞曲『義経ほり川夜うち』では「あつはれ司土は、弓とりのおもひ物や[18]」とあることから『異本』は幸若舞曲を基にしていると考えられよう。こうした緊急の場に対する機転については、「軍記評判」においても賞賛されている。『義経記評判[19]』では、

しづか其身白びやうしたりといへとも、時にのぞみて智の発することよのつねならず。
よしつねのてうあいし給ふこと、まことに其気すぐれたるものか。

とあり、武将の女のあるべき姿として静が称揚、描かれているといえよう。こうした点においては、武将も女性との関係を認めているといえよう。これに関して、関英一氏は、女性を取り上げることのほとんどない「軍記評判」において、『義経記評判』は静の性格を高く評価していると指摘されている。[20]

イ、「賤のをだまき」説話

次に、鶴岡八幡宮での「賤のをだまき」の舞の説話である。この著名な説話を『異本』は次のように記している。

因茲、頼朝公直ニ御尋有ルヘシトテ、同二年三月朔日、静並ニ母磯前司、共ニ鎌倉ヘ召レ、足立新三郎清経ニ預ケ置レ、時々義経ノ有所(アリカ)ヲ御尋有ケレ共、且テ存セサルノ由、申切ルト也。
其頃、義経ノ子ヲ懐胎ス。兼テ、「女子ナラハ静ニ賜ルヘシ。男子ナラハ遁ルマシキ」ノ由、仰ノ処、果シテ男子ヲ産リ。清経ニ仰セテ、害セラルト云リ。御台所、日頃静カ芸堪能ノ由聞召及ハセ給ヒテ、此事ヲ御所望有。静、辞シ申トイヘ共、一向仰ラル、ニ依テ、同四月八日、若宮ノ宝前ニテ芸ヲ施ス。畠山重忠・工藤祐経、其役ニ出ツ。静、先和歌ヲ挙、

吉野山峯ノ白雪踏分テ入ニシ人ノ跡ソ恋シキ
賤ヤ賤シヅノ小手巻繰返シ昔ヲ今ニナスヨシモ哉

頼朝公、此和歌ノ心ヲ聞召レ、仰ラル、ハ、「初発(シヨホツ)、先当家ヲ祝スルノ言有ヘキ処、サハナクシテ逆徒義経ヲ慕事、奇怪ナリ」ト宣ヒシニ、御台ノ仰ラル、ハ、「君、土肥ノ椙山ノ戦場ノ時、自カ心以テ比(タクラフ)ルニ、静カ所存最也」ト、宣ヒシトニヤ。御台所、姫君ヨリモ御憐愍有シト也。

［下26静鎌倉下向］

この箇所で特に注目すべきは、最後の傍線部であろう。静が、頼朝の面前で頼朝批判の舞を舞ったことに対して、頼朝の妻政子は静の心に感じ、機嫌を損ねた頼朝を諌めたという。こうした政子の静への賞賛は、

二位殿これを聞召して、「同じ道の者ながらも、情ありてこそ舞ひて候へ。静ならざらん者はいかでか御前にて舞ひ候ふべき。たとひ如何なる不思議をも申し候へ、女ははかなき者なれば、思召し許し候へ」と申させ給ひければ、御簾の方々を少し上げられたり。

と、『義経記』にもみられるものであり、[21] 原拠となった『吾妻鏡』[22]にも、

御台所被二報申一云。「君為二流人一坐二豆州一給之比。於レ吾雖レ有二芳契一。北条殿怖二時宜一。潜被二引籠一之。而猶和二順君一。迷二暗夜一。凌二深雨一。到二君之所一。亦出二石橋戦場一給之時。独残二留伊豆山一。不レ知二君存亡一。日夜消レ魂。論二其愁一者。如二今静之心一。忘二予州多年之好一。不二恋慕一者。非二貞女之姿一。寄二形レ外之風情一。謝二動レ中之露膽一。尤可レ謂二幽玄一。抵可二賞翫一給一云々。

とあり、特に「貞女之姿」という表現が注目される。静のこの説話は、武将に対する「貞女」のあるべき姿を示すものでもあったのである。こうした静を描こうとする姿勢は、続く「下27梶原景茂静無礼」においても、

時ニ梶原景茂、静ニ戯ル。静カ云ク、「尾篭ナリ。吾不肖ノ身ナレトモ、伊予守殿ノ妾ナリ。伊予守殿ハ、鎌倉殿ノ御連枝、汝カ為ニハ主君ナラスヤ。我君恙ナク渡ラセ給ハ、、吾、汝ニ逢ヘキヤ。汝カ親景時、逆櫓ト哉ラン臆病ヲ云出シ、其事ヲ隠ンカ為ニ吾君ヲ讒シ奉リシ事、世人普知ル処也。今、又汝カ、ル無礼ノ挙動(フルマイ)、人ノ作業ニ非ス。吾、汝ヲ謀寄テ、主君ノ仇ヲ報セン事、最安ケレトモ、同座ニ母有。後ノ報ヲ思フ女心ノ口惜サヨ」ト、落涙ス。景茂、頗面ヲ赤メ詞ナシ。座中興醒タル処ニ、邦道座ヲ立テ、双方ヲ宥、漸トシテ皆々退出ス。

此沙汰、鎌倉中ニ隠ナク人口取々也。御台所聞召シ、大キニ是ヲ感シ給ヒ、「最侍ノ思フヘキ女ナリ」ト宣フ。静、御暇ヲ給リ、都ヘ上ル時モ、御台所姫君ヨリ色々ノ珍物ヲ賜フトニヤ。

とあるように、景茂に対して「尾篭ナリ」「汝カ、ル無礼ノ挙動、人ノ作業ニ非ス。吾、汝ヲ謀寄テ、主君ノ仇ヲ報セン事、最安ケレトモ」とある。本説話は『吾妻鏡』文治二年五月十四日条を典拠としており、『義経記』にはみられない。こうした説話を選択することからも、『異本』編者が静を、「侍ノ思フヘキ女」として描こうとしていることが窺えよう。

以上、『異本』に登場する静の説話を検討した結果、単なる恋愛譚ではなく「良将」にふさわしい女性を叙述しようとする『異本』編者の姿勢を指摘できるであろう。

三、〈はかなき女〉としての牛王

『義経記』にはみられず『異本』にのみ登場する女性の説話として牛王説話が挙げられよう。これは、古浄瑠璃『牛王の姫』[23]に始まり近松門左衛門作といわれる『牛若千人切』[24]や奥浄瑠璃とし

て『牛王の姫貞女鑑』や『牛若千人切』、仮名草子『名女情比』[25]にもみられ、人気が高かったことが分かる。『異本』の牛王姫が登場する章段は「上3聖門坊」「上16鎌田兵衛娘牛王」「上17B牛王最後」の三つである。

ア、「上16鎌田兵衛娘牛王」

まず、「上3聖門坊」で「末ハ女子ニテ牛王女ト云タルソ。」と紹介されている。ここでは名前のみであるが、後に牛若に謀反を勧める聖門房[26]の妹として紹介されている。次の「上16鎌田兵衛娘牛王」は、古浄瑠璃などの牛王姫説話に重なる場面であるが、内容が全く異なっている。『異本』の女性観が窺える箇所をみていくことにする。

a. 午王常ニ平家ノ繁昌ヲ冷眼（メサマシク）思ヒケルニヤ。或時、何トナク資行ニ云ケルハ、「吾方様ノ人々ハ、有カ無カノ風情ヲ見聞ニ付テモ口惜侍ルナリ。君御志変ラスハ、若源家ノ人々ノ思ヒ立給フ事モ有ハ、必力ヲ合セ給ハンニヤ」ト云タリシ程ニ、資行、「斯夫（カク）ノ機関ヲナス上ハ、疎略スヘキニ非ス。若思ヒ立給フ御方モ有ハ、一番ニ資行コソ参ラメ」ト語ルニ、午王モ、女心ノ無墓モ偸解（ウチトケ）語ル程ニ、平家ノ繁昌ヲ憎、源氏ノ衰タル形勢ヲ歎タリ。

b. 資行、以ノ外ナル気色シテ、「仏事ハ去事ナレトモ、道ノ逗留、密夫ノ為ニヤ。但ハ、源氏ノ方人ヲ頼ンガ為カ」ト云テ、散々ニ打擲ス。午王ハ、琁モ（イサヽカ）諍ハスシテ、「最前酔狂ト思ヒシニ、カヽル不覚人トハ知スシテ、昵布思ヒタル我心ノ癡サヨ」ト思ヒテ離々（カレ）ニナリ、資行カ方ヲ退（サケ）テ、母カ許ヘ帰リ住タリ。

c. 資行カ母ハ、一向ニ午王カ我意ニ任テ資行ヲ嫌ヒシト意得タリシ程ニ、或時、資行カ母、鎌田カ後家ノ方ヘ音信シ。其時節（オリシモ）、義経、鎌田カ後家ノ所ニ居給フヲ見テ、其翌日資行カ母、平判官康頼カ方ヘ行テ、「午王カ、資行ヲ逆（サケ）タルコソ謂候。今ハ午王、牛若御曹司ト機関ヲナシテ、偏ニ謀叛ノ事ヲ進ルト聞ヘ候」ナド語リ出シタルニ、康頼声ヲ嗔恚（イカフカン）、「カヽル卒忽ナル事ヲ承リ候物哉。当時、誰有テ謀叛ト云フ事思ヒ立ヘキヤ。其上、九郎御曹司イマタ二十ニダニ成給ハヌ人ヲ、誰カ方人スベキ。此事露顕セハ、誠カ偽ヲ正レン時、若正シカラサル時ハ、猶モ寃ヲ聞ン為、御方（ヲコト）ヲモ責問ヘキナレハ、其証拠ナクハ、由々敷身ノ大事ニナルヘシ」ト云タリケレハ、母ハ相違シテ、「穴賢。人ニナ洩給フナ。告知スル者有テ斯ハ申タリ。其実ヲ知ラズ。若、平家ヘ聞ヘテハ身ノ為如何ニ候」トテ、母ハ帰リヌ。

内容をみていくと、aは、牛王が夫の資行に平家への謀反を勧めるという設定は、兄の聖門房と共通しており、鎌田一族が義経にどのように関わっているのかを示していよう。こうした牛王の

態度は「女心ノ無墓モ」と評されており、否定的に捉えられている。bでは、夫の資行が牛王の外泊に対し別に男がいるのか、或いは源氏と通じたかと疑い、牛王に暴力を振るうが牛王は争わず夫に見切りをつけ、母の許に戻るという内容である。他の牛王姫説話であれば義経との男女の仲が語られるべき場面であるが、『異本』では「密夫」と「源氏ノ方人」は別個の問題としている。cは資行の母が、牛若と鎌田が謀反を企んでいると平康頼に密告したが諌められるという内容であるが、この密告というモティーフは、古浄瑠璃の尼公、『義経記』巻七「大津次郎の事」の大津次郎の妻などに通じよう。また『異本』でも「下34佐藤忠信討死」で忠信の所在を密告する「力寿」なる女性が登場する。また「午王、牛若御曹司ト機関ヲナシテ、偏ニ謀叛ノ事ヲ進ルト聞ヘ候」とあるように牛若と牛王姫が男女の仲になっていることは窺えず、むしろ「平家への謀反」という方に比重がかかっている。

イ、「上17B牛王最後」

続いて「上17B牛王最後」をみていく。

d. 犬王カ母方ノ叔父、鮫嶌平次ト云者、如何聞タリケン、犬王丸カ後見シテ、夜更ニ鎌田カ後家ノ門ヲ敲、「平相国殿ヨリ御使ナルソ。爰ヲ明ヨ」ト喚リシ程ニ、午王ハ平家ヨリ御曹司ノ討手ニ来ルト心得テ、小長刀ヲ取テ待挂タルニ、内ハ暗シ、鮫嶌ヲ初トシテ、猶予居タリシニ、猶モ構テ待タランニハ、左右ナクハ取レ間敷ニ、女心ノ無墓サハ、小長刀ヲ打振テ奔リ出タリシ程ニ、不才生捕レタリ。禁肆、大宮ヲ下リニ五条ノ辺マテ連行ケルカ道ニテ刺殺、捨タルトニヤ。

dは、夜に訪問者が清盛の使いと告げたことを聞いた牛王が、討手と勘違いし小長刀で斬りかかるが、捕らえられ連行される途中で刺し殺されたという内容である。ここでの「午王ハ平家ヨリ御曹司ノ討手ニ来ルト心得テ、小長刀ヲ取テ待挂タルニ」という牛王姫の早とちりは、堀川夜討における静の機転のパロディのごときものといえる。また、「女心ノ無墓サハ、小長刀ヲ打振テ奔リ出タリシ程ニ、不才生捕レタリ」と再び牛王の振る舞いを「無墓」と評しており『異本』における牛王の評価はきわめて低いものである。他の作品に登場する牛王は、清盛の拷問にも屈せず牛若を救うために命を落としたまさに「貞女」として描かれており[27]、牛王が殺害されるという展開は他の牛王説話にはみられないものである。

『異本』の牛王説話に男女の関係を描く箇所がないのは、これまでみたように「良将」たる牛若の人物像にそぐわないためであろう[28]。しかし恋愛関係においては極めて簡潔に描かれていることが理解されよう。『異本』の牛王説話は、様々な依拠資料に拠った創作であろう。他の牛王説話と全く異なる展開にした編者の意図は牛王説話はあるいは静の「貞女」ぶりと対比するために配さ

れたとも考えられる。

四、〈勧める〉女性

ところで、『異本』には恋愛譚以外にも女性が登場する。本章では恋愛譚以外の女性像をみていくことにする。『異本』では、義経は聞き入れないが挙兵を勧める存在として女性が登場するという説話がみられる。

まず、東下りの途中で立ち寄った青墓で、

大炊、遮那王殿ニ「一向御家ヲ興シ給ヘ」ト、申タルトソ。「玄光ヲ御供サセン」ト、云シヲ、季春止メシト云リ。

［上6青墓大炊長者事］

と、謀反を勧められている。この青墓長者の台詞は他の「判官物」にはみられない独自のものである。また、母常盤も、

左馬頭能保朝臣ノ館ニ入レ、直ニ対面有テ義経ノ事ヲ尋給フニ、常盤宣ヒケルハ、「去年十一月朔日ノ夜、予州、侍従良成相共ニ来リ給テ、『鎌倉殿、景時カ讒言ヲ用ヒ、義経ヲ亡サントシ給フ。一先西国ノ方へ赴、身ノ科ナキノ由ヲ申啓カ程、何方ニ成共、暫忍テ有ヘキ』ノ由宣フニ、自カ申ハ、『西国ヘヒラキ給フ共、誰有テ鎌倉殿ヘ其真ヲ申啓ンヤ。讒者ハ日々壮ニ成テ渠儂為ニ亡サレンヨリハ、早ク軍兵ヲ集、都ノ内ニテ鎌倉勢ヲ引請、雌雄ヲ決シ給ハサランヤ』ト申タレ共、『讒者ノ為ニ咎ナキ都ノ者ヲ悩、剰上ノ御心ヲモ苦シメ奉ル事、本意ニ非ス。我一人西国ヘ赴、過ナキノ由謝申シ、叶ハサラン時ハ、運ニ任スルニテコソ候ハン』トテ、帰リ給ヒテ、後其先途ヲ知ラス」ト申切給フトニヤ。左馬頭モ憐愍シタマフト也。

［下30常盤糺問］

と、都での頼朝との決戦を義経に勧めている。本説話は『吾妻鏡』に拠っているが[29]、『吾妻鏡』では常盤と義経の義理の妹が捕らえられたとあるのみで、左馬頭能保朝臣との会話は他にはみられない『異本』独自のものである。結局どちらの勧めも、義経は受け入れずに終わるのであるが、こうした無益で機が熟さない戦を持ちかけられても、受け入れないという「良将」の姿勢を示しているのではないだろうか。特に、『異本』の常盤は、母子の情愛を描くよりも、こうした「武将の母」として描かれている。例えば義経が鬼一法眼から兵法書を盗み、牛王姫が殺害された後も、

其頃、平相国ノ「常盤カ子共、皆法師ニナセ」ト云ツルニ、「誰カ計ヒニテ、牛若丸ヲバ男ニナシタルソ」ト宣ヒタル由、沙汰有シヲ聞テ、常盤モ長成朝臣モ、薄氷ヲ踏心地シテ、「急キ奥ヘ下リ給フヘシ」ト宣ヒ、鞍馬ノ阿闍梨モ「兎角」

ト諫言給フユヘ、「サラハ下ルヘシ」トテ、八月中旬、都ヲ立給フ。　［上18義経奥州下向］

と、義経に再度奥州に下るよう勧めているのは、子を思う母の気持ちから、という感情はあまり感じられない。

おわりに

以上、『異本』における女性像を静の説話を中心に検討してきた。『異本』編者は、恋愛譚や母子の情愛といった義経と女性との関係を極めて簡潔に叙述する姿勢がみられた。女性の登場する説話も従来指摘されてきた構成上の破綻としてとらえるのではなく、「軍記評判」にみられる女性観に拠りながら義経に対する「好色」という批評を極力省略し「兵法の達者」や「平家追討の智将」としての義経を創出しようという『異本』編者の意識に即した女性像を描こうと意図しているといえよう。[30]

注

（1）以下『異本』と略す。本文引用は静嘉堂文庫蔵片仮名本（松井簡治氏旧蔵）に拠る。引用資料には私に傍線を附した。また『異本』の各章段名は拙稿「高松市立歴史資料館蔵『異本義経記』について」（『伝承文学研究』六一、二〇一二・八）で示したものを用い、上巻・下巻の別を併せて示した。

（2）拙稿「『異本義経記』と『太平記評判秘伝理尽鈔』」（『軍記と語り物』三四、一九九八・三）、西村知子氏「『異本義経記』の展開とその享受―『義経記』変容の一過程―」（『同志社国文学』五八、二〇〇三・三）など。

（3）拙稿「『異本義経記』の河越氏―義経兵法の系譜（一）―」（『論究日本文学』六八、一九九八・五）、「『異本義経記』の構想―〈良将〉としての義経像―」（福田晃氏監修『伝承文化の展望―日本の民俗・古典・芸能―』〈三弥井書店、二〇〇三・一〉所収）など。

（4）本論が引用の際に使用している静嘉堂文庫蔵漢字片仮名混本では「午王」と表記されるが、一般的な表記に倣い「牛王」とする。

（5）この他に義経の生母である常盤御前との関係を描いた説話もある。第三章参照。

（6）ちなみに『異本』では登場する女性にも実名を付ける傾向がある。「桂姫」の他にも青墓長者の「大炊」とその娘「延寿」（上6青墓大炊長者事）・為義女の「龍田姫」（上13鈴木重善）・河越重頼女の「朝為姫」（上19A義経平家追討）・那須与一説話で登場する平家方の遊女「玉蟲」（上21B屋島合戦）・佐藤忠信の妾「力寿」（下34佐藤忠信討死）がある。

（7）大城氏「『異本義経記』の検討」（梶原正昭氏編『軍記文

学研究叢書11　曽我・義経記の世界』〈一九九七・一二、汲古書院〉所収）など。

（8）注（3）拙稿。

（9）鬼一法眼女の名を「桂姫」とするのは他に土佐浄瑠璃正本『義経記』が「かつらのまへ」（巻二・四段目）とするのみで他は「皆鶴」とする。また『異本』には「桂姫」と「皆鶴」の両者を記載している系統の諸本も存在し注目される。拙稿注（1）参照。

（10）牛王姫に関する伝承は比較的分量が多いのが注目される。注（26）参照。

（11）河越重頼女（朝為姫）については拙稿注（3）参照。また義経が通った女性として他に「下33堀弥太郎景光生捕」などの久我雅通女などが登場する（本文は次の通り）。

義経在京ノ時、久我内大臣雅通公ノ姫君ニ通シ給ヒシニ、都ヲヒラキ給フ時、鷹司ノ辺ニ居給ヒシ此姫君ノ方、又ハ木工頭範季方へ、文治二年ノ秋、堀弥太郎景光、義経ノ使ヒニ上京シ、暫範季方ニ忍ヒ居タリ。

（12）『太平記評判秘伝理尽鈔』の引用は国立国会図書館蔵無刊期版本に拠る。以下引用は同書に拠り、『理尽鈔』と略す。

（13）『義経記評判』の引用は日本古註釈大成『太平記・義経記・源平盛衰記古註釈大成』（一九七九・八、日本図書センター）に拠る。

（14）巻五「静吉野に捨てらるる事」・巻六「静若宮八幡宮へ参詣の事」。

（15）静については、島津久基氏『義経伝説と文学』（一九三五・一初・一九七七・五再版、大学堂書店）本編第一部第一章第二節第三項「静御前と佐藤忠信」など。

（16）大城氏注（7）参照。

（17）丹緑本巻四「土佐坊義経の討手に上る事」。引用は岡見正雄氏校注『義経記』（一九五九・五、岩波書店）に拠る。

（18）内閣文庫蔵本。引用は吾郷寅之進・福田晃両氏編『幸若舞曲研究』六（一九九〇・一、三弥井書店）所収に拠る。

（19）巻四下・一「土佐房よしつねの討手に上る事」。引用は注（13）に拠る。

（20）関氏「『義経記評判』の注釈態度―引用書の検討を中心として―」（『国学院大学大学院紀要―文学研究科―』一六、一九八五・三）。また浜田啓介氏は「近世における曽我物語の軍談について」（『近世文芸』四九、一九八八・一一）において、「これらの武士道的美学に相容れないのは、婦人母系の介入である」として仮名本『曽我物語』を実録物に仕立てあげた『根元曽我物語』にみられる女性批判の個所を指摘されている。

（21）田中本巻六。引用は梶原正昭氏校注・訳『義経記』（一九九九・一二、小学館）に拠る。該当個所、丹緑本など『義経記』諸本では脱文であるため田中本に拠った。なお幸若舞曲『静』の当該個所に政子は登場しない。

(22) 文治二年四月八日条。引用は新訂増補国史大系本に拠る。
(23) 一六七三年（寛文一三）刊。
(24) 一六七九年（延宝七）刊。
(25) 巻三「牛王姫牛若君にあふ事」。一六八一年（延宝九）刊。
(26) この牛王の兄聖門房など鎌田一族の存在からは『異本』の牛王姫説話もまた古浄瑠璃『鎌田』などのような芸能作品との関連を窺わせ注目される。
(27) 牛王姫説話の中でも、古浄瑠璃『ごわうのひめ』と仮名草子『名女情比』では舌を噛み切って死に、その他の古浄瑠璃や奥浄瑠璃では炎に飛び込んで焼死するとなっている。
(28) 『異本』に様々な伝承を増補した体裁の作品に『義経知緒記』（以下『知緒記』と略す）があり、牛王に関しても注意すべき増補がみられる。例えば牛王の館に鮫島平次が訪れた個所で（〔　〕は『知緒記』の増補）は「〔其比牛王ハ義経ニ思ハレシカ、此由ヲ聞テ〕、平家ヨリ御曹司ノ討手ノ来ルト心得」とあり、幼少の牛王姫を抱いて母が大宮に逃げたという記述の後に「〔牛王何比ヨリカ義経通ヒ給ヒシニタ、モナキ身トナリシカ、近キ比流産シテ其比ハ労テ居タリト云リ〕」とある。『異本』にはみられない牛若と牛王の男女の仲が描かれていることから、『知緒記』の伝承が本来の形で『異本』が「良将」たる義経像にそぐわないために削除した、とも考えられよう。
(29) 文治二年六月十三日条。
(30) こうした女性観は他に『曽我物語評判』にもみられるものである。拙稿「『曾我物語』の周辺―『曾我物語評判』の女性像」（村上美登志氏編『曾我物語の作品宇宙』〈至文堂、二〇〇三・一〉所収）参照。本稿では触れられなかったが、こうした女性観のため恋愛譚の性格を強く持つ浄瑠璃姫説話は簡潔になり、兵法伝授に関係するため桂姫は比較的多く登場していると考えられる。桂姫（皆鶴）など、『異本』に登場する他の女性についての検討は続稿を期したい。

［附記］
貴重な資料の閲覧を許可された諸機関に厚く御礼申し上げます。

（やまもと・じゅん　本学非常勤講師）